

「源氏物語の方法」ノート

森 一 郎

拙著「源氏物語の方法」について諸氏の御書評をいただいた。「

国文学解釈と鑑賞」昭和四十四年十一月号の伊藤博氏、「藤女子大
学国文学雑誌」昭和四十四年十一月号の大朝雄二氏、「国語と国文
学」昭和四十五年一月号の藤村潔氏、「国文学」昭和四十五年二月
号の後藤祥子氏らが、それぞれ親切な御批評を下された。

この際、わたくしの新しい飛躍、前進のために、諸氏の御厚情の
あふれる批評に感謝しつつわたくしのメモをしるしておきたい。

伊藤博氏の批評から――

「紫式部の宮仕え生活と源氏物語」に対して「私はたとえば定子
の後宮に処を得て文化的連帯の雰囲氣にひたりきる式部の、幸福
な、姿を想像できない。一方日記を貫く彰子・道長への讃仰の叙述
も忘れ得ぬ。夕顔・女三宮・浮舟物語も詩的ロマン性といった共通
項でくくるにはあまりに豊かな内実をもってそれぞれ自立している
のではなからうか。」といわれる氏の批評にまったく同感である。斎
院中将攻撃の一節に対するわたくしの解釈は、彰子中宮の後宮の姿

をそこからうかがいとる程度にとどむべきであった。ただし、
彰子・道長への讃仰の叙述は後宮女房としてしかるべきことであ
った。それは式部の性格とからませるべきことではあるまい。夕顔・
女三宮・浮舟には共通性があることは否定しえない。しかしそれぞ
れが豊かな内実をもって自立していることはいうまでもない。

「桐壺巻の高麗の相人の予言について」の氏の批評も妥当とすべ
きである。予言全体で准太上天皇を伏在するものといわれる玉上博
士や多摩博士らの御説はやはり重い。しかし、この予言に、准太上
天皇の伏在する構想的意義を重視しようとしたわたくしの意図
は、今後もあためておきたい。それと共に、「桐壺・若紫・澁原
の三つの予言の照合一致」に対し、氏が「同時に状況・主題の展開
に於いて微妙にズレがあることも重視したい」といわれた的確な御
指摘に共感していることもしるしておきたい。いわば、長篇性と短
篇性の問題でもあるが、主題の展開のこまかな追究という視点のも
とにいわれる氏の教示にしがたがって共感し、御教示に感謝する次第

なのである。なお、この予言の問題についてはさきに藤村潔氏の御批判をたまわっており（『源氏物語の構想——若菜巻から横笛巻まで——』「国語と国文学」昭和四十三年七月号）、桐壺帝錯誤論は、藤村氏や後藤祥子氏の言われるように、作品そのものだけを対象とせねばならぬのに、物語世界の論理からズレているのである。物語の論理にしたがうとき、桐壺帝の判断は正しく、「国乱れ、民憂うる」ことを避けた寂慮はまことに尊かったのであった。ただ、「またその相たがふべし」（臣下の相とは見られない）という言葉と帝の明快な決定との関係に対するわたくしの疑問について諸賢の御検討を賜りたいと思う。「ことばじり」（藤村氏前掲論文）として片づけるわけにはいかないのではあるまいか。玉上博士の評釈では、もともと天子の相なのだから、と説明されているが、観相が後半に及んだとき、すでに天子への道の進路は否定され、臣下の道の進路としてそれがまた否定されているのである。天子でもなく臣下でもない道が暗示されていることになるのだ。それなのに帝は臣下への道を明快に指示されたのだ。わたくしはもはや「花鳥余情」寄りの拙論を捨てているから、拙論を固執しようとして言っているのではない。ただ、この疑問の提示だけを残しておきたいのである。それは作者の方法として注目すべきものだからである。

大朝雄二氏の批評から——

伊藤博氏も「源氏物語の方法——回想の話型」について、わたくしの視点が享受面に集中していることを指摘され、その時点時点における物語の論理との連関があらためて問われる必要があることを教示された。大朝氏はその問題についてより詳しく問題点を指摘され、「女三の宮事件」に関する拙論を焦点に御教示をたまわった。作者の構想の意図とはなれた享受の論に対する疑問の提示であった。若菜巻の主題を二分することには伊藤、後藤両氏も反対されている。わたくし自身、作者の意図と別のことだとことわっているのだが、大朝氏は「主題」という言葉をそれにかぶせるべきでないと言われる。この点についての氏の御教示は、氏の源氏観の深みから迫ってくるものだけに誠実に問題の所在を明らかにされるもので深く感謝する。この女三の宮論については初期のわたくしが女性中心に、個別的な人物論の視点で構想・主題・人物論をあやつっていた人物論的作品研究の欠陥を反省させられる。それは後藤祥子氏の指摘された、明石上物語や六条御息所死霊事件などを包括した、大朝雄二氏・武者小路辰子氏らの立論のあるように、女三の宮事件だけを抽出することは反省を要し、大朝氏の強調されるように、この若菜巻前後も主人公は光源氏なのだ。

作品に沈潜するよりほかに方法はないのだということであらため

て反省させられる。視点は作品から生まれるもので、作品へつきつけるものではないのだ。『作品密着主義』も単に読者の視点からであってはならず、あくまで作品からくみあげるべきなのだ。学問とは、真理の探求とは、まこときびしいものなのだ。

藤村潔氏の批評から——

長篇性と短篇性の問題について氏は近時、十年単位説という注目すべき説を出され、作者の構想展開の方法について新しい視点を教示していられる。短篇性の問題についても「つめこみ」方式ということを書いていられる。その氏の関心を焦点として御批評下さっているのだが、氏の御指摘の通り、わたくしの視点に揺れがある。

竹河巻頭が過去を照射するとき、御法巻に玉鬘が登場しなかった理由をも回想させる。これは、あくまで竹河巻において回想させられるものであって、御法巻の時点で想定できるといふわけではない。もし、それをしも想定することになれば、物語の論理、主題とはなれた、想像ということになり、「描かれざる世界」の想定が、物語の論理とはなれてもかまわないということになってしまふ。また、竹河巻頭の敷衍の意図は、過去を回想させるための文ではない。あくまで、玉鬘の侍女たちの視点で語ることをこわっているのである。しかし、わたくしは、「源氏の御族にも離れ給へりし」の「離れ」に注目し、次の段落の、髭黒薨後の玉鬘とその生活

を叙したくたりの「故殿惜すこしおくれ、むらむらしき過ぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふこともありけるゆかりにや、」などを参照して、過去を回想し、御法巻の玉鬘が出ない理由をも想つてみたのであった。伊藤氏や大朝氏の言われたとおり享受面の効果に集中しており、過去のその時点で語られなかったことの、附着的回想は、果して作者の方法かどうかということが微妙であろう。わたくしとしては、藤村氏の評価されたように附着的回想の語型を基本的には作者の方法と見ているのであるが、だが、それを見出したわたくしの方法は作品享受の立場であった。この事は拙著全体にわたることである。この立場が、藤村氏の指摘されるわたくしの視点の揺れを生む原因になっているようだ。すなわち、人物の必然を追求する立場をしりぞけながら、時にその視点に立ちもする。読者としてのわたくしの恣意が、そしてそこから来る視点の揺れが、作品の世界とのずれを生むばあいがあるのである。なお、長篇として源氏物語を見ようとするとわたくしの近時の意図もその視点の揺れの原因で、昭和四十年以後に屈折点があるという氏の御指摘はまったく正しい。

後藤祥子氏の批評から——

氏の言われたように、人物の造型上の変化から主題の進展、変化をさぐる作業・論証を急ぎたいと思う。主題論にひとつの新視角た

りうるか否か。長篇的主题の問題、短篇的主题の問題とも関連するであろう。ともあれ、わたくしの提起した作業は、一面的、機械的にならないようにしなくてはならない。

主題論について氏の御指摘をいただいたように、新しい見解をまとめる必要も感じている。若菜巻の特質については諸先輩のすぐれた業績があり、その深い文学的命題は源氏物語の深淵というべきであらう。

源氏物語の回想の語型については、作者の方法と見なすべきものの、読者の享受の次元のもの等まじえている。作者の方法と見なしうる一点に論を集中する必要がある。伊藤氏の批評をも思い合わし、後藤氏の評価された物語の技法の指摘という点に向かって関心をそそぎたい。読者の享受の次元と作者の方法に胚胎するものとのそれは短絡させてはならないと思う。

諸氏の御厚情に深く感謝申しあげ、一応これで反省や抱負のメモをとじる。

(昭和四十五年一月)

前号(第十六号) 目次

金春禪竹の運命

斎藤清衛

桐壺帝の決断

森一郎

— 桐壺巻の高麗の相人の予言についての再説 —

納庵夫人・大橋巻子の生涯とその文藻

松田光子

「若菜集」の成立をめぐる

垣田時也

切韻解題 二章

三沢諄治郎

子産(四)

山岡利一